

「それぞれの子どもらしさを求めて」より (二)

名古屋市立大高幼稚園

かみなりの空

きょう絵をかいているとき、空がどんよりとくもってきたことに、教師自身気がつかなかった。隣にいたあさ子が何か話しかけてくるので、なんだろうと思って聞いてみたら、

「あつかみなりの空だ」

という。最初は何のことをいっているのかわからなかったが、空をみると曇ってきているので

「ほんとうだ、かみなりが鳴って雨が降り

そうだね」

と答えると、

「うん、そうだよ雨が降りそうだね」

とうなずいた。

◇ ◇ ◇

「雨が降りそうな空」と「かみなりの空」という二つの表現はくらべるとおとなと子どもの感覚のずれのようなものがあると思

う。子どもの感じ方にはとらわれがなく楽しさを感じる。特にあさ子の表現にはよりそのことを強く感じさせられ、感受性の豊かな子どもであると思った。絵をかいているときでも、

「でっかいあかーいおぼけをかいてやろう」

といって画面いっぱい真赤にぬりつぶしたりする。(四歳児 五月二十二日)

ぼくのかたつむり

登園すると、製作コーナーにすわりこんで、もくもくと製作をはじめたみおが、きょうは

「先生、あれどうしたの？」

と壁画をさしている。

「先生が作ったの」

「かたつむりも先生が作ったの？」

「そうよ」

しばらくすると、何やら作りはじめた。教

師のかたつむりをまねて紙を切り、マジックインキで、目とからをかき、「先生かたつむりができたよ」と見せにきた。

「あらほんとうだ。たみおちゃんのかたつむりね。かわいいのができたのね。うしろに先生のかたつむりといっしょに、はわせておこうかな」

壁面にはり終ると満足した表情をみせ、つづいて違うものを作りはじめた。

◇ ◇ ◇

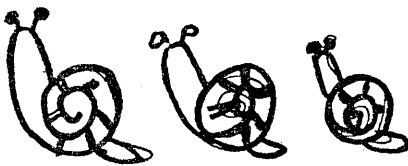
環境設定として教師の作ったものに刺激をうけ、教師と同じものを製作してみたいという気持ちでいっしょうけんめいに作ったものである。しかしかたつむりの表情は教師のまねではなく、全くその子らしさが出ていてほほえましい。子どもの活動をみていると教師のしていること、友だちのしていることに非常に関心をもって、自分もしてみたい、作ってみたいと思っていると

いうことをいろいろな場で感じるのである。例えば、なわとびを園庭のすみでひとりでとんでいた、サッカーごっこにはいれるようにとボールけりをいっしょうけんめいに行っている姿を見る。それでこそ子どもは成長するといえる。まねがまねに終ることなく、その子らしさを認めることにより、その子の創造性が育ち、努力する心情も生まれるのだと思う。

また人的環境として子どもにさまざまな影響を与え、教師自身のあり方の重要さを改めてかみしめることができた。(四歳児 六月四日)

ぼく 友だちと遊んだよ

父の日のプレゼント



の製作を終えたふみおが、ぼんやりと積み木遊びをみている。ひとり遊びの多いふみおが積み木遊びの子どもたちと、かかわりをもってくれないかと思ったので、「ふみおちゃん、先生といっしょに入れてもらおうか」

と誘ってみた。うまく教師の誘いにのってきて積み木遊びの中に入ることができた。しばらくして、教師はその場をぬけたが、ふみおはそのまま残って遊んでいた。しかし、表情をみると、あまりおもしろくないように思われた。無理にひっぱりすぎた感じがしたが、そのままようすをみることにした。表情はあまりかわらなかったが、みんながやることは、同じようにしようとする姿はみられた。友だちとのかかわりもてなかったようで、昼食は、積み木遊びの友だちとは全く違った席で食べていた。午後どのようなきかけがあったのか、じゅん・つねお・ゆきひろたちと、追いかけて

こをしていた。大きな声をあげ、汗をいっぱい出し、真っ赤な顔をして遊んでいた。

◇ ◇

ふみおは、入園当初からひとり遊びが多く、友だちとかかわりをもてるようになるチャンスがなかった。教師がいろいろ働きかけてもうまくいかない場合が多い。しかし、きょうの場合、いくぶん強引なさそいかけであったと、反省する面もあったが、午後の遊びのきっかけになったのではないかとも思う。遊べない子どもへの、接し方のむつかしさを感ずると共に、教師の積極的なかわりもまた人・時・所を考えていかなければならないと思った。

(四歳児 六月十二日)

ほんとうだ すごい！

雨降りのため、園庭に出られない子どもたちは、ごさを出し二・三人で絵本をひろげてみている。その中のひとりが教師に

「これよんで」

といって、「のろまなローラー」の絵本をもってきたのでよんでやる。

そのあと、ただおはひとりでその本をかかえこみ、

「ほんとうだ、すごい」

と声を出しながら一枚一枚いっしょうけんめいにみている。

◇ ◇

教師といっしょにみている時に感じた部分をたしかめているようだった。ひとりでじっくりとみているこんな姿を大切にしたいと思う。(四歳児 六月十八日)

ほくの水族館

たかやは積み木でかこんだ中にパズルのかめを入れて遊んでいた。

「あらここにかめが泳いでいるわ」

「そうだよ、ここは水族館だもん」

と当然だという顔で返事をした。

「そう、先生もやっぱり水族館じゃないかなと思つたわ」

◇ ◇

おとなは水族館であれば、いろいろな魚がいるところという状況を思いうかべてしまふ。そのような表現をしていないと水族館というイメージは出てこない。しかし、子どもは水族館の中で、最も興味をもったもの、そのみを表現し、それでじゅうぶん水族館として満足する。
「水族館だもん」ということばは子どもの思考がよくあらわれていると思った。

(四歳児 六月十九日)

おはながさいた

より子が、紙を小さくふくらませ、下の方をセロテープでとめたもの(次頁の絵)をもってきて、うれしそうな顔をする。

「何かおもしろいものができたね」

といいながら、何だらうと考えたがわから

ない。

「お花のつぼみみたい。きつときれいな花が咲くんだね」

と話しかけてみた。より子は、それを教師に手渡しして、「そうだ」とも「ちがう」ともいわないで、どこかへ行

ってしまった。しばらくしてから形は同じで、前より大きいものをもってきた。



「あら、つぼみが大きくなったね。もうすぐお花がさくかな？」

と、そのままつぼみということで話をした。すると、それも教師に渡し、また製作コーナーへ行く。今度は円すい形をおしつぶしたような形のものをもってきた。教師は前の作の作品のことを忘れて、

「指にはめるのかな？」

ときくと、首を横に振る。それをみて、全然見当違いのことをいってしまったことに

気づいたので

「ああそうだ、花が咲いたんだね。きれいな花になったね」

というところ、うんとうなずいてくれた。

◇ ◇ ◇

結果的には、つぼみがふくらんで、花が咲くまでの、過程を表現したということである。最初より子が、教師にみせてくれたときのものが、何であったかはわからぬ。教師とかわりながら、より子らしい表現で、イメージをふくらませていったことにおどろくとともに、無口で消極的なより子が、せいっぱい、教師にかかわろうとしている姿ではないだろうかと思われる。

(四歳児 七月十八日)

おかあさんがいなくなっちゃった

ままごとで遊んでいたさき子が、

「赤ちゃんが病気のな」

といった。

「まあ、困ったわね、じゃ一度わたしがみてあげましょう」

と赤ちゃんののどをみるふりをする。

「これはへんとうせんですね。薬をのませて、暖かくしてあげてください。わたしが薬を作ってあげましょうね」

えみ子もってきてくれたかれた花で薬を作る。

「まだこの子予防注射がしてないの。金曜日に予防注射があるんだけれど」

「じゃ、注射につれていってあげて」

「だっておかあさん出ていっちゃっていいんだもん。お金をもっていかなきゃいけないしお金はだまって持ち出してはいかんもん」

と困った顔でいう。

「では、おかあさんよんでくるわね」

と聞いて製作コーナーにいたきよ子に、

「おかあさん、赤ちゃんが病気ですって。早く帰ってきてください」というと、

「だって、わたしもうやめたのよ」

といって、全然関係ないといったようすで何かを作っていた。

◇ ◇ ◇

結局おかあさんはどうなったかわからないが、ままごとはずっとつづいていた。おあさんを待っている子どもとおかあさんのきよ子との、この空間をどううめたらよいか。あとで考えると「ああすれば」とか「こんなことばをかければよかった」といろうかんできくのだが、瞬間的にはどうしようもないことが多い。子どもの遊びは常に流れているしもどらないと思う。その場の子どもの感情に、敏感に反応していくことの大切さを痛感させられる。

(四歳児 十月十七日)

フフフフーなーんだ

最近、たつおとすみおが、いっしょによく絵本をみている。ほんとうに楽しんでみ

ているのだろうか。どんなみかたをしているのだろうか興味をもっていた。きょうも一日中といっけいいくらい本棚の前でみ

ているので、教師もすわりこんでいっしょに見ることにした。ふたりは同じ本を何度

も何度もみながら、

「びっくりしてるよ」

とふたり顔を見合せて、

「フフフ……」

と笑ったり、

「なーんだ」

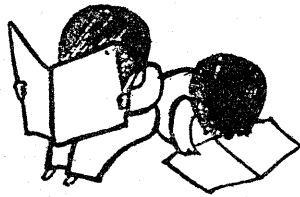
などと絵の表情や内容を読みとり楽しんでいる。きつとふたりに通じ合うものがあるのだろう。

◇ ◇ ◇

子どもの遊びとかひとりひとりの子どものことについては、外側からみているだけではわからないことが多い。教師も子どもの友だちとしてはいっていくことによつて、子どもの内面が外からただ見ているよ

りはわかっていくようになる。

(四歳児 十月二十三日)



ハンカチ・ポーン

ひとしが、園庭で自分のハンカチを上を放りなげると、落ちてくるのをつかむというのを、何度もくりかえしてひとり遊んでいた。軽い中にもハンカチの重味があり、片手でつかめる大きさであり、横でみ

ていて楽しそうに思えた。ひとしが、放りあげた時、ひとしより高い位置で、ハンカチをとり放りあげた。ひとしも、必死につきかもうとする。教師は、とられまいとする。このようにしてしばらく遊んだ。こんな簡単なことでもやってみると面白いんだなあと感じた。そのあと、細長い紙に、「ひとし」と書いては、何枚ももってきてくれた。

「先生にお手紙くれるの？ うれしいわ」というと、にこにこして、次には絵をかいてもってきてくれた。

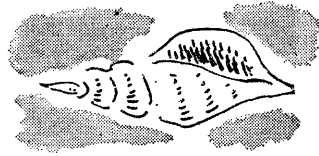
◇ ◇ ◇

ひとしは、無口で今までは積極的に教師にかかわっていないし、どう接したらよいかと考えていたところであった。このように短い時間ではあったが、ちょっとしたかわりが、教師と子どもを一步步近づけた原動力になったように思う。子どもと同じことをしてみることによって、何か通じ

るものが、出てくるということを感じた。

(四歳児 十月三十一日)

(カットも同書より)



幼児の教育 第七十四巻 第十号

十月号 © 定価二〇〇円

昭和五十年九月二十五日印刷

昭和五十年十月 一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします